

論文番号	12 (第 10 回研究会 2012.11.24 於青山学院大学)
タイトル	語る活動が創出する仮想環境に応じた各主体による自己の捉え直し
著者名(所属)	名塩 征史 (北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院)
連絡先 Eメール	nashio@imc.hokudai.ac.jp
<p><b>論文内容</b></p> <p>行為を含む様々な出来事の意味は他の事象やその場の環境をコンテキスト化することでより明確なものとなる[1]。C. Goodwin によれば、個々の行為は先行する行為連鎖 (sequence of actions) やその時その場の状況を指標とし、そこに埋め込まれることで「それが何をしていることになるのか」、その意味機能を明確にできるとされる [2]。また J. L. Mey による語用実践行為理論では、そのときその場の環境がそこで何をすべきか、何ができるかを予め制限しており、我々はその場の環境によって限界づけられた中で可能な言語使用を目的や意図に即して選択し、実践しているものとされる [3]。行為はより大きな行為の中に埋め込まれ、また環境もより大きな環境の中に埋め込まれているという「入れ子構造 (nesting)」を想定する議論は少なくない[4][5][6]。個々の行為はその場に並置される他の物事事象や周囲の環境との間で相互特定の関連づけられることで適切に意味づけられるものと考えられる[7]。しかし、我々はその時その場から時空間的に距離のある未来や過去の出来事を想像・想起し、それに対する思考や評価を伝達する場合もある。その場合の出来事もまた、いくつもの小さな物事事象から成り、それらはある環境の中に埋め込まれ、相互に関連づけられている。従ってそうした未来や過去の出来事を表現・再現する際には、個々の物事事象を含み込む環境をまるごとその場に創出する必要があるだろう。我々は日常的な会話活動の中でそうした仮想環境をどのように創出し、未来や過去の出来事を現在の場に表現・再現するのだろうか。本研究は、会話の中で語り手が自己の身体の動きと配置によって仮想環境を創出する具体的な活動の様相を分析・記述し、思考や評価を伝達する上でその対象となる事象 (群) が適切な環境とともに表現・再現されることの有用性について考察するものである。</p> <p>本研究では、日本人 3～4 名を一組として行われた会話活動 (計 13 組) をビデオカメラで撮影し、その内容を会話分析的手法によって観察・分析した。撮影時間は各組約 60 分で、その活動内容は特別な制限や課題が与えられておらず、飲食などを伴って行われるいわゆる「雑談」である。本発表ではその中の一組である日本人女性 4 名の会話活動において「ブーケスというセレモニーがどれだけ酷なものか」について語られる場面を抽出し、語り手の身体的な振り舞いを交えたマルチモーダルな活動と、その周囲で何が起きているのか、聞き手が何をしているのかを分析した。</p> <p>分析の結果、次の 3 点が明らかになった。1) コンテキストとして参照される仮想環境は、語り手が他者を仮想環境内のどのような存在として捉え直すかを示す行為によって実在の場に投影され、2) その語り手の「演劇性」[8]に促されるように聞き手も自己を仮想環境内の存在として捉え直すようになる。そして、3) そのような捉え直しによる主体間での仮想環境の共有は、これから語られつつある内容の一部を、語り手による言表を待たずに、聞き手がその環境から直接体験し把握することを可能にしている。1)から 2)の過程では、語り手が自己の上体と視線の向きによって実際には目に見えないブーケの位置と動きを特定し、それと同時に語り手の隣に座っていた聞き手を語り手と同じく「ブーケを受け取る側」に配置する。それにより当該の語り手と聞き手は「ブーケを受け取る二人」として互いの位置関係 (距離) を捉え直すこととなり、その後の語りをブーケスの仮想環境の中で「ブーケを受け取る主体」の視点から意味づけ体験しているものと考えられる。</p> <p>語り手の臨場感あふれる身体的活動が実際の活動の場とは異なる場、すなわち語り手の演技がリアルな行為として認識される場を一時的に仮設することで、距離や配置を含む周囲の実在に対しても新たな解釈の可能性が生み出される。未来や過去の出来事を「今ここ」に表現・再現する上では、その出来事を構成する個々の物事事象を適切に意味づける仮想環境を創出し、かつその創出の過程で聞き手となる他者をも仮想環境の構成要素として引き込むインパクト (たとえば臨場感) が必要であると考えられる。</p>	

参考文献

- [1] Silverstein, M. (1993) Metapragmatic Discourse and Metapragmatic Function. In John A. Lucy (ed.), *Reflexive Language: Reported Speech and Pragmatics*. Cambridge University Press: pp. 33-58
- [2] Goodwin, C. (2002) Conversational Frameworks for the Accomplishment of Meaning in Aphasia. In C. Goodwin (ed.), *Conversation and Brain Damage*. Oxford and New York; Oxford University Press: pp. 90-116
- [3] Mey, J.L. (2001) *Pragmatics: An introduction*. Malden; Blackwell. (小山亘訳『批判的社会語用論 入門—社会と文化の言語』三元社 2005)
- [4] Gibson, J.J. (1979/1986) *The ecological approach to visual perception*. Psychology Press. (古崎敬他訳『生態学的視覚論』サイエンス社 1985)
- [5] Goodwin, C. and Goodwin, M.H. (2004) Participation. In Duranti, A. (ed.), *A companion to Linguistic Anthropology*. Blackwell: pp. 222-244
- [6] 鈴木健太郎(2001)「行為の推移に存在する淀み—マイクロスリップ」佐々木正人・三嶋博之編『アフオーダンスと行為』金子書房: pp. 47-84
- [7] 佐藤由紀(2006)「一人芝居の身体—イッセー尾形の一分間—」佐々木正人編『アート／表現する身体：アフオーダンスの現場』東京大学出版会: pp. 55-74.
- [8] 菅原和孝(1997)「会話における連関性の分岐—民族誌と相互行為理論のはざままで—」谷泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社: pp. 213-246